News

「2024年能登半島地震における調査とその後」

JSCA東京・ASDO　技術研修会を共催

東京構造設計事務所協会（略称・ASDO）と日本建築構造技術者協会関東甲信越支部東京サテライト（略称・JSCA東京）は7月13日、日本大学理工学部駿河台校舎1号館で技術研修会「2024年能登半島地震における調査とその後」を共催。会場45名、オンライン77名が参加した。

「建築構造にかかわる最近の研究」をテーマに全4回で開催予定の、1回目の講演となる。

はじめに金田勝徳氏（構造計画プラス・ワン主宰）が企画趣旨を説明。同形式の技術研修会が19年続いていることと、講師の吉敷祥一氏（東京科学大学教授）の研究について紹介した。

続いて講師の吉敷氏が登壇。能登半島地震の調査に対して、寄せられる関心が高いことから「色々なところで同じ講演をしている。今回で5回目なので『その後』と題して写真を増やした」とユーモアを交えて講演を始めた。

被災度判定の基準について、小学校の体育館など文教施設の実地調査の被害例を挙げた。写真とともに損傷具合のランクを紹介した。

相対的判断になりがちな被災度区分判定を、学術的根拠に基づいた絶対基準で判定する必要性を述べた。調査結果の比較や、大学での再現実験を基に改訂した経緯を説明した。

講演テーマの「調査とその後」は、輪島市の建物の傾斜した建物について紹介。2024、2025、2026年度を比較し、木造建屋は96％が解体、非木造建物は29棟中22棟が解体されたと発表した。

吉敷祥一教授